

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて

著者名(日)	古瀬 敏, 阿蘇 裕矢, 根本 敏行
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	8
ページ	127-130
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000156/

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて

Practicing Universal Design in the Community

古瀬 敏

デザイン学部空間造形学科

Satoshi KOSE

Department of Space and Architecture, Faculty of Design

阿蘇 裕矢

文化政策学部文化政策学科

Yuya ASO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

根本 敏行

文化政策学部文化政策学科

Toshiyuki NEMOTO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

静岡県がユニバーサルデザインを行政施策の中心の一つとすることを決めてから10年近くが経過しているが、なかなかそれが実態として地域に根付くまでに至っていない。本研究はそれを推進するための方策を検討するものとして位置づけ、当該年度は現状評価と将来に向けての方針の検討を行った。

Almost ten years have passed since Shizuoka Prefecture decided to place universal design as a key concept of local community policy. However, the progress seems slower than hoped. Present research aimed to grasp the current status, and tried to find proposals for actual implementation of the concept.

1. はじめに

すでに知られているように、ユニバーサルデザインは静岡県そして浜松市における行政施策の中心となっていて、本学の設立理念の一つとしてもユニバーサルデザインが挙げられている。しかし、ことばとして挙げるだけではそれが着実に実現されることを意味するわけではなく、着実に根付かせるためには、さまざまな努力が必要であることは言を俟たない。本学では、この分野における実績を持つ教員が多数在籍しており、その経験と知恵とを活用することが実践に大いに寄与することから、「文化・芸術研究センター長特別研究」として本研究を立ち上げたものである。

本研究の初年度である平成18年度は、10月に京都で開催された第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議における積極的な参加ならびに情報収集と、当該会議に出席した海外専門家による本学での講演を主要な軸とし、さらにとくに浜松市におけるユニバーサルデザインの今後のあるべき姿の検討を開始した。

2. 国際ユニヴァーサルデザイン会議

京都で開催された国際会議に当たって、古瀬敏教授は大会事務局に要請されて論文審査委員長を務め、会議の場で発表しようと応募してきた論文の査読の手配、そして査読結果を検討しての最終的採否決定に関与した。そ

こでは、2002年に横浜で開催された前回会議の成果をふまえ、この分野における世界の最近の動向を把握するとともに、わが国からの発信が適切になされるよう心がけた。とくにこの点は、ほとんどの分野において以前より情報の取り込みにはきわめて熱心だが発信はほとんど皆無に近く、「巨大なブラックボックス」として指摘され続けてきている日本の成果を対外的に出す重要な場として位置づけられた。それは近年の関連企業のユニバーサルデザインに対する取り組みの積極さを踏まえれば、どうしても行わなければならないと判断されたことでもある。

ただ、当初の発表論文募集時には日本での成果に関しては和文での応募も許容され、さらに国際的に情報を共有するという会議の本来の趣旨が企業関係者に十分に伝わらなかったきらいがあり、英文で出すのがある意味で国際会議の最低限のマナーであるとは受け取られなかったようである。査読結果を受けて修正されて最終的に会議用に提出されたものも、国際会議開催時に参加者に配布されたCD-ROMに収録された本文は和文のみで英文は要旨だけというものが少なからずあって、積極的な参加を掘り起こすという事務局の意図は達成されたものの、情報の国際的な共有という側面からは若干悔いが残った。会場での発表に当たっては、日英の同時通訳が行われ、また全体会合にあっては日英のコンピュータ要約筆記が行われたので、一定程度

の知見の共有化は行われたと言えるが、それでも会場での通訳の有効性はかなり限られていた（写真1）。

しかし、2002年に開催した横浜での会議に比べれば、会議開催を契機として2003年秋に設立された国際ユニヴァーサルデザイン協議会の積極的な動き（そもそも今回の会議の主催母体が同協議会である）のおかげで、わが国の民間企業の取り組みに関する報告数が格段に増え、NPO活動の報告も前回と比較して多かったことは指摘できる。このことは同時に開催された展示会に、さまざまな製品や試作品などが対外的によく見える形で出されたこととあいまって、日本での現状と試みが国際的に理解されたといえよう。これは2002年の横浜での会議、そしてその後2004年にブラジルのリオデジャネイロで開催された米国主導によるUD国際会議での日本の存在感と比べれば、隔世の感があった。

なお、今回の国際会議で設定された自治体からの発信という全体会合に関しては、静岡県知事が海外出張と重なってしまったために

他の自治体首長が登壇して発表することになり、壇上で静岡そして浜松がパネリストに加わるという機会を逃してしまったのは、わが国で最初にユニバーサルデザインを施策の中心に据えた静岡県にとっては残念だった。なお、古瀬敏は、わが国各省庁の取り組みという全体会合セッションにおいてコーディネーターを務め、日本での政府を含めてこの分野（バリアフリーとユニバーサルデザインとが混在している状況ではあるが）での進捗状況を対外的に知らせるのに一役買ったことを補足しておきたい。

もう一つ、会議の際に参加者に配られたCD-ROMだけでは情報の伝達が十分ではないとの判断から、各発表者に要請して改訂版の論文を提出してもらい、それを編集して正式な会議論文集を刊行することになった。作業が予想以上に手間取り、1年経った時点でまだ印刷が終了していないが、この報告が公表されるまでにはISBNが付された形で出版されているはずである。



写真1：国際ユニヴァーサルデザイン会議全体会合で要約筆記が行われている様子

3. ユニバーサルデザイン国際セミナー

京都での国際会議に参加した専門家をそのまま返すのはもったいないと考え、浜松に招いてユニバーサルデザイン国際セミナーを開催しようという企画は、調整にかなり手間取ったもののなんとか実施にこぎ着け、10月28日（土）午後には本学において実施された。

2003年度と2004年度に続けて開催した同様なセミナーでの講演内容を意識し、今回は火災などの非常時における建築物からの避難をどう考えるか、というテーマと、日本における製品などのユニバーサルデザインは海外からはどう見えているのか、というテーマを選び、米国と英国の専門家の講演をお願いした。

まず古瀬敏から、おさらいの意味も兼ねてユニバーサルデザインの一般的状況を報告した後、米国から来日しているエドウィナ・ジュイエ女史から避難安全に関わる話題提供をお願いした。米国では1970年代後半より、身体障害者などの建築物からの避難安全

の問題が継続して議論されてきており、ジュイエ女史は「障害者の生命安全に関する全米行動委員会」を設立、以後一貫してその流れに関与してきている。米国では、大きな災害が起きるたびにその影響がどうか、どう変わるべきかが関係者の間で議論されてきているが、とくにこの数年に起こったさまざまな災害は連邦政府や州政府に的確な対応を迫っている。2001年9月11日の同時多発テロもそういった一連の動きの中で議論がされているし、さらにニューオーリンズを襲ったハリケーン・カトリナによる問題なども踏まえての対応が考えられていることから、こうした一連の動きなど、わが国に参考になることの紹介を受けた。

ついで、英国グラスゴウ美術大学デザイン学部のアラステア・マクドナルド教授から、わが国におけるユニバーサルデザインの動きが海の向こうからどう評価できるかについて、話題提供がなされた。マクドナルド教授はこの2年ほど、京都の立命館大学に滞在して日本のユニバーサルデザインの状況を調査研究すると



写真2：講演はパワーポイントを用いて行われたが、日英の通訳と手話通訳が手配された。

もに大学院の学生たちに教育を行ってきているので、その経験が紹介された。2004年初頭に話題を提供していただいた英国ロンドンの王立芸術大学のロジャー・コールマン教授からの講演と合わせて、わが国におけるユニバーサルデザインの、とくにヨーロッパから見ての特徴が指摘されたといえよう。

あいにく当日はさまざまな企画が並立し、また事前広報も手配が遅れて十分ではなかったことから聴衆数は少なかったが、講演内容と質疑に関しては、共催いただいた静岡県のご協力を得てテープ起こしを行いWebに掲載した(注参照)ので、内容伝達の目的は果たしたと考えている。なお、当日は日英の逐次通訳以外に、手話通訳をお願いした(写真2)。ただし近年情報保障のために行われるようになりつつあるコンピュータ入力による要約筆記は、予算の関係もあって、行うことができなかった。

4. 地域におけるユニバーサルデザインの実践に向けて

ユニバーサルデザインの地域での実践のためには、当然のことながら地域で活動している人々との協働が必須である。2007年4月に政令指定都市となる浜松市においては、旧浜松市と合併で新たに加わった地域との間でさまざまな点で格差・温度差があると指摘されていたが、ユニバーサルデザイン室が行ったタウンミーティングで、ユニバーサルデザインについても同様な問題があることが浮き彫りになった。旧浜松市における「浜松ユニバーサルデザイン」で達成されている水準は、新たに加わった地域にとっては現状よりずっと高い水準であり、ユニバーサルデザインの理念をお題目のように唱える前とにかく自分たちの地域の建物・施設の物理的状況を同程度にまで引き上げてほしい、という意向が強く表明されたのである。これはじつは浜松市ユニバーサルデザイン室が企画した展示の巡回に当たっても、地域によってはエレベーターがない建物の2階で行わざるを得ない、つまり展示の趣旨にそぐわない、という事態が生じることで問題の深刻さが端的にあらわれた。なお、市役所が管理運営しなければな

らない建物・施設については、そのユニバーサルデザイン適合の程度が2006年度末に向けて調査されており、現状把握そして将来に向けての課題が明らかになりつつある。

そうこうしているうちに、たまたま都市計画学会中部支部から打診があり、2007年2月26日に本学において地域連携シンポジウムを開催することになった。学会大西隆会長の基調講演の後、石川岳男まちづくりセンター長より「政令指定都市を迎える浜松市の都市課題」、阿蘇裕矢が「まちづくりの新しい展開」、古瀬敏が「ユニバーサルデザインのまちづくり」と題して講演を行い、その後根本敏行が加わってのパネルディスカッション「協働による浜松のまちづくり」を行ったが、これは本学が浜松市のあるべき姿について市民向けに発信する場となった。

人口の高齢化、中心市街地空洞化、それに伴う自家用車移動と公共交通機関利用との綱引き、といった全国どこでも課題となっている点に加え、これまでほとんど例のなかった人口が集中している都心と過疎地域をともに抱える政令指定都市として、どのような都市関連施策を打ち出すべきか、市民の意識と専門家の経験に基づく知恵との組み合わせが求められる中で、今後に向けてのネットワーク構築が期待されることになった。当然のことながらユニバーサルデザインは、あるべき姿を議論する上での中心的キーワードであり、住み続けられる都市なのか、満足して死ぬことができるか、という厳しい問いに答えられるかどうかであろう。

注：

ユニバーサルデザイン国際セミナーの記録は、下記のページに置いてあるNew!の項目から質疑を含めて4つのワードファイルとしてダウンロード可能である。なお、2004年の講演の記録もそれより少し下から探すことができる。
<http://homepage2.nifty.com/skose/KoseHPJ.htm>

参考文献

International Conference for Universal Design, Yokohama 2002, CD-ROM
The Second International Conference for Universal Design in Kyoto 2006 CD-ROM, ISBN978-4-9903720-0-2